

# アメリカの薬学教育と日本の薬学教育の違いについて

薬学部 5年

## 1.はじめに

2019年9月1日～9月15日の期間に、アメリカでの薬学実習が行われた。ノバサウスイースタン大学（以下 NSU）での講義の聴講、薬局見学、病院見学、患者さんをサポートするためのコールセンターの見学などが主な内容であった。日本で薬局・病院実習をすべて終えてからアメリカでの実習に参加をしたため、日本とアメリカの様々な違いを肌で感じることができた。その中でも特に驚いたことがある。それは、教育の違いだ。以下で特に違いを感じた2点について述べていく。

## 2.大学の授業スタイルについて

奥羽大学の普段の授業は、授業で内容の理解を深め、家で宿題や自主的に問題を解く形が多いと感じている。知識は授業で得るという、受動的なスタイルだ。予習が求められる科目もあるが、それ以外の予習については個人による。基本的に教科書、又は科目担当教員の用意したプリントやスライドを用いて授業が進んでいく。

NSUでは、反転授業が行われていた。反転授業とは、自宅で授業内容を勉強し、講義では実践的な問題を解くという、「授業」と「復習」が入れ替わったような授業スタイルのことだ。授業の前日までにメールでスライドや講義ビデオが送付され、個人で勉強し、講義の時間は症例問題の解答と解説が行われていた。授業の内容も、臨床で役立つように、各疾患の治療ガイドラインに基づいて行われていた。

奥羽大学では、臨床的な症例や知識などを学ぶことができる治療ガイドラインに基づいた授業は少ない。NSU と比べ、奥羽大学では、薬剤師として必要な最低限の知識を学ぶ授業が多いと感じた。ほとんどは11週間ずつ行われる薬局・病院実習に行って学ぶようなものだ。大学での薬剤師教育という観点において、NSUでは卒業してから即戦力になる人材育成、日本では就職後現場で学び成長していくような教育なのではないかと考えた。しかし、NSUの薬学部は、日本で言う大学院のような位置づけだ。日本の薬学6年教育とは異なる。NSU入学前に基本的な知識をつけているからこそ、時間的な余裕があり、臨床的な授業内容を豊富に取り入れることができ、実践的な教育に力を入れることができるのではないかと考えた。

## 3.臨床実習について

日本の薬学教育において、臨床現場での実習期間は、薬局で11週間、病院で11週間の計22週間である。実習内容はコアカリキュラムに沿っていて、達成すべき目標と、学ぶべき代表的な8疾患が定められている。実際に日本の実習を終えて感じたことは、達成すべき目標は、レベルが高いということだ。CBTやOSCEに合格し、最低限の知識を得て

いたとしても、座学で学んだことと実際の現場で役立つ知識の乖離が感じられた。薬の作用機序や、どの疾患に使用可能な薬なのかを覚えているのかは、国家試験対策的には重要だが、臨床の現場で求められる知識は、患者さんに対する薬の投与量や治療方針などである。

NSUの実習は、3年次の後期後半から少しずつ始まり、4年次は6週間×8種類の項目を学ぶと聞いた。そのうち4種は必修で、残りの4種は選択することができる。選択可能な項目は細かく分かれていて、数も多く充実していた。例えば、感染症と一括りにするのではなく、何の菌種の感染症なのかで項目が分かれている。

NSUの実習は、ほぼ1年間、最終学年で行われ、卒業すれば臨床の現場ですぐに活かすことのできる知識をつけられるように感じた。日本では、6年間の薬学教育のうちに22週間のみの臨床実習、そして実習終了後から現場に出て働くまでに1年以上の期間が空いてしまう。薬学生として、臨床に出るまでの期間が長いことは不安要素の1つだ。

#### 4.まとめ

アメリカ人が薬剤師になるためには、日本でいう大学の位置にあたる教育課程で基礎科目を2～3年間、もしくは地域の4年制大学を卒業、そして、日本でいう大学院にあたる教育課程で臨床知識を3～4年間学ばなければならない。州ごとに薬剤師になるために必要な学習期間は異なるが、アメリカでは最長で7～8年学ばなければならない。日本の薬学教育6年間よりも1～2年学習期間が長いと、アメリカでは実習期間も多く取ることができ、ガイドラインを取り入れた授業を行うことが可能なのだと考えた。

私は、アメリカの薬剤師事情だけでなく、アメリカの薬学教育の良い点を1つでも持ち帰り、それを日本の薬学教育にも取り入れるためのきっかけをつかむという目標で海外研修に参加した。実際、ガイドラインに基づいた授業を行っているという素晴らしいことを学ぶことができた。私は、奥羽大学でも、ガイドラインを取り入れた授業をもっと増やしてほしいと考えた。しかし、すべての疾患をガイドラインに基づいて学ぶことは、6年間という限られた時間ではほぼ不可能に近い。そのため、日本で患者数が多い疾患や、臨床実習で触れることになる代表的8疾患だけでも、ぜひ取り入れてほしいと考えた。そうすれば、大学で学んだ知識を実習で活かすことができ、さらなる知識を身に付けることができるのではないかと考えた。